

『源氏物語』と催馬楽引用、覚え書

——夕霧・雲居雁の結婚をめぐつて——

『源氏物語』にはその特異な表現性を支えるべく、多種多様な引用が張り巡らされている。神話や物語、あるいは漢詩文や和歌といった、種々の表現を踏まえることで、豊かな作品世界が紡ぎだされていることは周知のことであろう。以下は『源氏物語』にみる歌謡（催馬楽）引用をめぐる、ささやかな覚え書きである。

『源氏物語』と歌謡の関わりについては、植田恭代氏の論究がある^①。神楽歌・催馬楽などの宮廷歌謡が、いかに『源氏物語』の表現世界を支えるかということが、同書において明らかにされたのであった。また本稿で取り上げる催馬楽引用について植田氏は、宇治十帖の物語を中心に考察して教えられる。正篇における引用ということでは、かつてわたくしにも朝顔巻・薄雲巻における神歌（神楽歌・催馬楽）の問題を考察したことがある^②。そこでは朝顔齋院・六条御息所・源典侍・藤壺の宮の物語にみる、神歌引用の重要性を論じた。また同じく正篇における催馬楽引用の問題については、帚木巻を中心に空蟬の物語におけるその意味を問うてみた^③。その過程で、催馬楽「我家」の引用が、中の品の女・空蟬と光源氏の性愛関係を導き出すことが確かめられたのであった。

さらに正篇にみる催馬楽引用として気になるのは、夕霧と雲居雁の物語におけるそれである。夕霧・雲居雁は筒井筒の恋に互いに心を尽くしながら、父親たち（光源氏と頭中将）のライバル関係のあおりで長らく引き裂かれることを余儀なくされた。そしてようやく藤裏葉巻において、

めでたく結婚に漕ぎ着ける。その婚儀の宴に当たる部分。夕霧が内大臣（頭中将）邸の藤の宴に招かれ、一連の流れのなかで雲居雁との結婚へと誘われていこうとするくだりである。

御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御気色を賜はりて、頭中将、花の色濃くことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りてもて悩むに、大臣、

紫にかごとはかけむ藤の花に松よりすぎてうれたけれども
宰相盃を持ちながら、気色ばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いくかへり露けき春をすぐしきて花のひもとくをりにあふらん
頭中将に賜へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ
次々順流るめれど、酔の紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。

（日本古典文学全集により、一部表記を改めたところがある。以下同じ）
咲き誇る藤の花、巡る順の盃、唱和される藤花の歌——この場面は、雅で華麗な宴の典型のごとくに描写されている。しかし、実は、夕霧の物語において、かくも晴れやかな慶賀の場面は初めてなのであった。そのことについては、かつて賀歌・盃酌歌のありかたから論じたことがある^④。元服の儀においても盃酌歌のことが語られないばかりか、この藤裏葉巻

小嶋 菜温子

の大団円に至るまで、夕霧は賀^{II}慶祝の場から遠ざけられてきたのであった。内大臣が誦んじ、巻名の元ともなった「藤の裏葉」は、知られるとおり、

春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まん

〔後撰和歌集〕春下 読人しらず

に拠る。「うらとけて」——わだかまっていた心も溶けて、貴方が望むのならわたくしも貴方を婿として頼りにしましょう、との和解の気持ちを籠めた言葉であったのだ。そして、夕霧の盃に内大臣が挿した藤の花は、まさに娘・雲居雁を象徴するものにほかならなかった。

この大団円において、催馬楽引用が花を添える。前掲の植田氏も宇治十帖の浮舟・匂宮の物語に関する論述のなかで言及するとおり、藤裏葉巻で夕霧・雲居雁が結婚するくだりに催馬楽「葦垣」「河口」の引用が見られる^⑤。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだほのかなるこずえどもさうさうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。例の弁少将、声いとなつかしくて、葦垣をうたふ。大臣、「いとけやけうも仕うまつるかな」とうち乱れたまひて、「年経にけるこの家の」とうち加へたまへる、御声いとおもしろし。をかしきほどにみだりがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。

松に懸る、藤の花。藤裏葉巻の源氏絵でも、この藤懸りの松が必ずといってよいほど描かれるとおり、印象的なシーンである。内大臣の子息の弁少将が美声で歌う歌謡「葦垣」。その声に和す内大臣の発声は、夕霧との長年のわだかまりを解き、いつき娘の雲居雁に婿を迎えようとの意思表示でもあった。宴も最高潮に達し、「みだりがはしき」までの管弦の遊び

に、「もの思ひ残らず」——長年のわだかまりも、すっかり溶けたことであろう、と。まことにめでたい結婚の宴となったわけである。

ちなみに「年経にけるこの家の」とは、次の催馬楽「葦垣」の一節によるもの。

葦垣葦垣 真垣かき分け てふ越すと 負ひ越すと 誰 てふ越す

と 誰か 誰か この事を 親にまうよこしし とどろける この

家 この家の 弟嫁 親に まうよこしけらしも 天地の 神も

神も 証したべ 我はまうよこし申さず 菅の根の すがな すが

なき事を 我は聞く 我は聞くかな

「真垣かき分け」「負ひ越す」のは、もちろん男——葦垣をかき分けて、男が女を背負って連れ出そうとするのを、誰が親に告げ口したのだろう……弁少将の歌う「葦垣」は、夕霧の耳にいささか痛いところでもある。親の反対に会いながら、垣根を越えて女を連れ出した男——まさしくそれは、夕霧自身に他ならないからだ。そこで「いとけやけうも仕うまつるかな（妙な歌を口にするものだな）」と口をはさんだ内大臣がその歌を引き取り、右の歌詞の「とどろける、この家の」を「年経にけるこの家の」と替えて歌い加える。それによって、一場をうまく収めた格好となったのであった。内大臣家はそれこそ経年の高家に違いない。さらに言えば、夕霧・雲居雁の筒井筒の恋こそ、内大臣の反対をものともせず、「年経にける」までの曲折に耐えたのだ。

やがて宴の場から雲居雁の寝所まで、内大臣の嫡男・柏木に導かれる夕霧。その折の、夕霧と内大臣のやりとりの呼吸は絶妙だ。

やうやう夜更けゆくほどに、いたうそら悩みして、「乱り心地いとたへがたうて、まかでん空もほとほとしようこそはべりぬべけれ。宿直所ゆづりたまひてんや」と、中将に愁へたまふ。大臣、「朝臣や、御休み所もとめよ。翁いたう酔ひすすみて無礼なれば、まかり入りぬ」

と言ひ捨てて入りたまひぬ。

「そら悩み」——悪酔いのふりをする夕霧が、「乱り心地」を口実に「宿直所」をと柏木に求める。それを受けて内大臣は柏木に「御休み所」をご案内せよと命じた上で、「翁（自称）」は「酔ひすすみて無礼」ゆえに失礼する、と奥に引つ込むのであった。その物言いについて「言ひ捨てて」と形容されるところは、内大臣のせめてもの矜持を示すものだろうか。

かくして「宿直所」を求めた夕霧は、内大臣の御墨付を得る形で、「御休み所」へと導かれることとなったわけだ。もちろんそこには、いとしい雲居雁が待っているはず。

中将、「花の蔭の旅寝よ。いかにぞや、苦しき導きにぞはべるや」と言へば、「松に契れるは、あだなる花かは。ゆゆしや」と言へば、……

夕霧にとつてはこれ以上ない上首尾だが、案内役を命ぜられた親友の柏木としては、一言言いたくなるというもの。「花の蔭の旅寝」であるとすればどうしましょう——かりそめの契りであるなら、妹のために遺憾なこと——と間接的に釘を刺すのであった。対する夕霧は、「松に契れる」永遠の契りであり、浮気な「あだなる花」などではあるはずがないと言ひ返す。「ゆゆしや」——不吉なおつしやいますなどの付け加えは、今めでたく迎えようとする初夜を、自ら寿ぐ意味もあるだろう。藤花と松をめぐる応酬が、宴の場からの一連の流れを受けたものであることは言うまでもなからう。

そしてついに、内大臣に許された藤の花——雲居雁との対面の時を迎える。夢かと思うまでに心躍らせる夕霧は、先の弁少将の歌った「葦垣」にかこつけて、新妻に戯れかかるのであった。

「少将の進み出しつる葦垣のおもむきは、耳とどめたまひつや。いたき主かなな。『河口の』とこそ、さし答へまほしかりつれ」とのたま

へば、女いと聞きぐるしと思して、

あさき名をいひ流しける河口はいかがもらしし関のあらがきあさまし」とのたまふさま、いと兎めきたり。すこしうち笑ひて、もりにけるくきだの関を河口のあさきにのみはおほせざらん年月のつもりも、いとわりなくて悩ましきに、ものもおほえず」と、酔にかこちて苦しげにもてなして、明るるも知らず顔なり。人々聴こえわづらふを、大臣、「したり顔なる朝寝かな」とがめたまふ。されど明かしはてでぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔見るかひありかし。

試練を経て内大臣公認の契りを交わす喜びに満ち溢れた、二人の戯れは実に微笑ましい。「葦垣」を歌った弁少将への恨み言も、ほんの軽口の風情だ。それが証拠に、夕霧の言葉をついて出たのは、これまた催馬楽「河口」によるものであった。

河口の 関の荒垣や 関の荒垣や 守れども はれ 守れども 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣

河口の関守がいたけれども、荒垣を出て、「我」は恋人と寝てしまった——この「我」は男性なのか女性なのか、両説あるが、前掲植田書では習俗的な観点から男性の可能性が高いとする^⑥。ただ、関の荒垣を「出でて我寝ぬ」とある点で、女性説にも一理あるだろう。先に引用された「葦垣」は、女を背負って垣を「越す」男の歌であった。それに対して、この「河口」のほうは垣を「出で」て男と「寝」てしまった女を歌うものと考えられないか。雲居雁がこれを聞き苦しう思つて、誰がそれを漏らしたのかとの歌を詠むのも、自らが女性の立場で主体的に関を「出でて」共寝したという文脈を下敷きにするほうが、より馴染むようにも思われる。雲居雁の歌は、「河口はいかがもらしし（河口の関を超えたという、浅はかな噂を誰がもらしたのかしら）」というもの。拗ねてみせる新妻に対し

て、夕霧は「河口のあさき（わたくしの口の軽さ）」にのみ責任転嫁しないでほしいとやり返す。ここにも、私と（自発的に）共寝した貴女にも責任がある、との含意を読み取るほうが、より分かりやすいだろう。そういえばその昔、二人は幼いながら相思相愛の仲にあったように語られていたことも想起されよう（それゆえ余計に内大臣の怒りを買ってしまったのであった）。

いずれにせよ催馬楽「葦垣」「河口」の引用が、親に反対されながら通じてしまう男女の性愛の機微を浮き彫りにすることには変わりなからう。読みようによっては際どくもある痴話的なやりとりとともに、新婚初夜を送った二人。忍従の果てにようやく内大臣の許しを得たこの日、夜が明けるのも知らず顔であったというのも無理からぬことであろう。これに内大臣は「したり顔なる朝寝かな」と苦りきる。しかし、内大臣の強硬な反対にも心変わりすることなく、ついに佳き日を迎えた二人のこと。そうそう簡単には離れがたいのも道理と言えよう。筒井筒の恋に始まった夕霧・雲居雁の物語。時を経て、こうして二人は一对の男女として、親公認の契りを交わしたのであった。

晴れやかな藤花の宴から、藤花Ⅱ雲居雁との初夜へ——藤裏葉巻の一連の描写は、見事なまでの展開を見せた。藤花をめぐる盃酌歌に彩られた賀宴。そこから一転して、「宿直所」「御休み所」での新婚夫婦の痴話的なやりとりが、催馬楽「葦垣」「河口」の性愛的なニュアンスを漂わせつつなされる。ここに見た催馬楽引用は、長い冬を耐えた二人を讃え、寿ぐための洒落た趣向であったとすることができるだろう。

実は、この大団円にみる催馬楽引用に先駆ける表現が、夕霧・雲居雁の物語のもっと早い時点においても見出せるのである。いまだ夕霧と雲居雁の恋が暗礁に乗り上げていた、常夏巻でのことだ。当該箇所は玉鬘・光源氏の物語が軸になるところであるので、ことは夕霧・雲居雁の問題

に留まらない。同時に『源氏物語』における催馬楽引用の全体を捉えなおすことも必要になるかと思う。稿をあらためて、じっくりと考えていく必要を感じているところである^⑦。

『源氏物語』における神歌（催馬楽・神楽歌）引用の重要性については、さらに多角的に掘り下げる余地があるものと思われる。そのことを通じて、『源氏物語』の表現性を明らかにすることが、もとより大切なのは言うまでもないことであろう。おおかたのご教示を賜りたい。

注

- ① 植田恭代『源氏物語の宮廷文化 後宮・雅楽・物語世界』笠間書院、二〇〇九年。小文は同書に多く導かれた。
- ② 小嶋菜温子「神歌のちから」『源氏物語批評』有精堂、一九九五。同「〈老い〉の身体と性——源典侍と神楽歌・再説」『源氏物語の性と生誕 王朝文化史論』立教大学出版会、二〇〇四年。
- ③ 小嶋菜温子「〈空白の身体〉——空蟬と光源氏にみる催馬楽・風俗歌」『源氏物語の性と生誕 王朝文化史論』(②に同じ)。
- ④ 小嶋菜温子「賀歌——盃酌歌と賀の時空」『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』加藤睦・小嶋菜温子編、世界思想社、二〇〇七年。
- ⑤ 前掲植田書(①)。
- ⑥ 前掲植田書(①)。
- ⑦ 小嶋菜温子「『源氏物語』と催馬楽——ハレの時空から性愛・結婚まで」『王朝びとの生活誌——『源氏物語』の時代と心性』小嶋菜温子・倉田実・服藤早苗編、森話社、二〇一三年。

付記・中西健治先生には、中古文学会大会(二〇一〇年度秋季大会)の会場校を立命館大学でお引き受けいただき、多大なご尽力を賜りました。先生の記念御論集に拙文を寄せさせていただきますことも合わせまして、深甚より感謝申し上げます。

(立教大学教授)